

一緒に壁を壊そう

マルコによる福音書10章46～52 笠原光見

初代教会のリーダーの一人であるパウロは教会の人々にこう言っています「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです（ガラテヤ3章28）」と。

この言葉から初代の教会は、それまであったさまざまな隔ての壁を打ち壊し、国、民族、身分や性差を超えた共同体であったということ、すべての隔ての壁を超えた共同体であろうとしたことが分かります。なぜなら彼らを、そして私たちを一つとしてくださったイエス・キリストが、神と人と、人と人との結びつき、交わり、関わりを隔てるような壁を打ち壊し、取り除く働きをされたからです。

イエスさまは、ユダヤ人が交流をできるだけ避けていた異邦人とも関わりを持たれませんでしたし、人びとから社会の周縁に追いやられてしまうような、貧しい人々にも、体の不自由な人々にも真剣に向き合い、寄り添い、神さまの憐れみと、癒しと、救いを伝えました。

罪人や娼婦と言われ差別を受けるような人たちとも食事をし、交わることを通して彼らに、「神はあなたを見捨てていない」ということ、「神はあなたのことを絶えずみ心に留めているのだ」という福音を伝えました。

イエスさまのもとに連れてきた子どもたちのことを弟子たちが邪魔者扱いし、イエスさまとの交わりを遮ろうとしたとき、イエスさまは憤って「子どもたちをわたしのもとに来させなさい」と弟子たちを叱りつけたこともありました。

そして、今日の福音書の箇所です。「憐れんでください」と何度も叫び、懇願する盲人を人々が、おそらく弟子たちも一緒になって叱りつけ黙らせようとしたのに対して、イエスさまは盲人の叫びに立ち止まり、彼を傍に呼び寄せるように弟子たちに命じて、彼と向き合うのです。

イエスさまは盲人の目を開き、「あなたの信仰があなたを救ったと」宣言されます。盲人の信仰とイエスさまの深い憐れみと愛とが、イエスさまと盲人との間に人々が立てようとした壁を壊しました。そして、イエス・キリストの癒しと、救いの出来事が起きたのです。

弟子たちはどうして盲人の必死の叫び、「憐れんでください」という祈りを叱りつけ、黙らせようとしたのでしょうか。イエスさまを煩わせないようにしようと思ったのでしょうか。盲人のことをイエスさまは相手にしないと思ったのでしょうか。もしもそうであったなら彼らは今のいままでイエスさまの何を見て来たのでしょうか。はっきり言ってしまえば信仰的に弟子たちは盲目だったということができるのではないのでしょうか。

かえって誰が叱りつけようとも、「イエスさま、憐れんでください」と叫び続け、誰が黙らせようとしても、「イエスさま、憐れんでください」とますます大きな声を張り上げ続けた、叫び続けた、目の見えない盲人の方が救い主イエス・キリストを確かに見ていた、ということができないのではないのでしょうか。

人はどうしても自分の都合のいいように物事を見てしまうのかもしれませんが。見ているつもりでも、自分の作った壁の中で、自分の思ったようにしか見ていない。弟子たちは無意識にかもかもしれませんが、自分の都合、自分の理想、自分の思いどおりに壁を立てて、その世界がすべてであるかのように思い込み、壁の向こうが見えなくなっていたのかもしれませんが。

イエスさまはその壁を打ち壊そう、取り除こうとするのです。道に座り、物乞いをしてきた盲人が「憐れんでください」と叫んだそのことに対して人々はみな叱りつけ、黙らせようとした。

ただ一人イエスさまだけが盲人の叫びに立ち止まり、ただ一人イエスさまだけが盲人の言葉に応答しようとし、「あの男を読んできなさい」といって彼を受け入れるのです。

このときイエスさまは、ご自身が盲人の傍に歩み寄ることができたはずですが、それをせずに、さっきまで盲人を叱りつけ黙らせようとしていた人々に、弟子たちに盲人を呼んでくるようにさせました。弟子たちにその身をもって盲人に歩み寄ること、隔ての壁を壊して、分け隔てなくイエス・キリストのもとへと招き、呼びかけるものであるようにと教えようとされたのではないのでしょうか。

イエス・キリストの名を掲げている私たちの教会と、そこに連なる私たちは、分け隔てをする壁を立てはいいのでしょうか。牧師と信徒との間、信徒と信徒との間、そして教会と外の人々との間に壁は存在していないのでしょうか。

キリストの教会で、神さまが結び合わせた人と人との間に壁があるとしたらそれは悲しいことだと思います。そして、キリストの教会と神さまが結び合わせようとしている、まだキリストを知らない人との間に隔ての壁があるなら取り除かなければならないことだと思うのです。

もしも壁があると感じるなら、誰かや、何かのせいにするのではなくまず自分から、あの盲人と同じように「イエスさま、私を憐れんでください」と祈り続け、「見えるようになりたいです」と願い続ける必要があるのではないのでしょうか。壁を超えるための力を、壁を壊すための勇気をくださいと祈り続けること、声を上げ続けることが必要なのではないのでしょうか。

イエスさまは盲人を置き去りにはしませんでした。イエスさまは、弟子たちをとおして盲人に、「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ」という言葉を伝え、キリストと盲人の間に立てられていた隔ての壁を取り除かれました。

「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ」という言葉を聞いて、「盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た」といいます。道端で座り込み、物乞いをし、人々から置き去りにされそうになっていた盲人にとって、「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ」という呼びかけの言葉と、その言葉に込められたイエス・キリストの深い憐れみと、大きな愛に触れ、躍り上がらずにはいられなかったのだと思います。

キリストの教会が多くの壁に囲まれて、神さまによって結び合わされた交わりの喜びを、福音を聴く喜びを、福音を伝えていく喜びを失いかけているなら、壁を超える力、壁を壊す勇気と、聖霊の導きをみんなで祈りましょう。

叱られても、黙れと言われても叫ぶことを止めなかった盲人のように、倦むことなく、あきらめることなく願いましょう。「壁を越えた世界を見たい。見えるようになりたいのです」と願い、祈って生きましょう。

そして、みんなで一緒に分け隔ての壁を越えて、壁を壊して、互いに「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」と呼びかけ合い、躍り上がってイエスさまのもとに集い合う者でありたいです。